

初稿『白痴』における庶子モチーフと イッポリートの形象

松 本 賢 一

1. 中傷家・陰謀家としてのイッポリート

『白痴』（1868）のための創作ノートのある箇所、登場人物の一人、イッポリート・チェレンチェフについてドストエフスキは次のようなメモを残している。

（・・・）イッポリートは抽象的である。「生きるべきか、死すべきか？」（・・・）
＜ 9 - 277 ＞

実際のところ、末期の結核患者で余命を1週間と宣告されているこの18歳の少年が読者に強い印象を与えるのは、主人公ムィシュキン公爵の誕生日の夜会で朗読する『わが欠くべからざる弁明』（以下、『弁明』と略す）と、それに続く、自然という「蜘蛛の形をした暗い力」＜ 8 - 341 ＞の支配から自己を解き放つために試みたピストル自殺とによってであり、この二つの点以外では、『白痴』という作品におけるイッポリートの人物像は必ずしも鮮明なものであるとは言い難い。

イッポリートの『弁明』朗読と自殺未遂は、読者に唐突な感じさえ与える。確かに、治る見込みの無い病に冒され、自らの余命を2週間と知らされた、理知的で誇りの高い少年が、「自分自身の意志で始めかつ終えることの出来る唯一の仕事」＜ 8 - 344 ＞として自殺を考えることは決してあり得ないことではないだろう。だが、そのような蓋然性は、イッポリートという個人の内面に則したものであって、『白痴』という小説の筋の展開に則したもので

はない。そもそもこの物語の中にIPPOLITOという少年が登場し、唐突に自殺を図るということ自体が、十分に動機付けられているとはいえない。IPPOLITOは死を前にした思弁の内容においてだけではなく、作品世界におけるその存在自体が「抽象的」なのである。

ところでこのIPPOLITOに中傷を好む陰謀家としての側面があることについてはこれまで余り注意が払われていない。小説の第3篇でピストル自殺に失敗した後、一見物語の後景に退いたかに見えるIPPOLITOは、実は、ムィシュキン公爵とナスターシャ・フィリッポヴナ、そしてエパンチン家とイヴォルギン家を巻き込んだ一連の醜聞事件に深く喰い入っていく。ムィシュキン公爵に対するガーニャ・イヴォルギンの悪意を逆手に取ってイヴォルギン家に入り込んだ彼は、イヴォルギン将軍が窃盗を働いたことをその妻に告げ口したり、既に半ば精神の平衡を失っているイヴォルギン将軍を嘲弄し、更に煽り立てて憤死に導いたりする。また、非公式ではあるが既にアグラヤ・エパンチナと婚約したムィシュキン公爵に、ガーニャが変わることなくアグラヤに情熱を燃やしていることを示唆し、「あなたの足元には穴が掘られていますよ」< 8 - 431 >などと告げ口するのも彼である。ガーニャ・イヴォルギンは腹立ち紛れにIPPOLITOのことを「あいつは大変な告げ口屋で、悪い事や醜聞めいた事は何でもかんでも嗅ぎ出す鼻を持っている」< 8 - 392 > と評する。この言葉はIPPOLITOの中傷家・陰謀家としての側面を的確に表しているが、このような性格と『弁明』に垣間見ることのできた彼の少年らしいナイーヴな感受性や正義感との落差は、さなくとも「抽象的」なIPPOLITO像を一層統一性に欠けた不明確なものとしているともいえよう。

中傷家・陰謀家としてのIPPOLITOの面目が最も躍如としているのは、病状が進んで憔悴し切っているにも拘らず、わざわざムィシュキンを訪ねて来て、自らがお膳立てしたアグラヤとナスターシャ・フィリッポヴナの会見がその日の夕方にあることを告げる（第4篇第8章）ことであろう。この行為によってIPPOLITOは小説『白痴』の悲劇的な結末をも用意したのだと言っても過言ではない。それまで微妙な緊張関係にあった、ムィシュキン、アグラヤ、ナスターシャ、ロゴージンの「四角関係」は、IPPOLITOが

お膳立てしたこの会見によって、ロゴージンによるナスターシャ殺害というカタストロフに向けて一挙に坂を転がり落ちていくからである。

このようなイッポリートの中傷家・陰謀家としての性格は、彼の余命が僅かしか残されていないことや、ピストル自殺の失敗によって自尊心が傷つけられたことだけに起因するのではない。問題は、『白痴』の構想過程において、イッポリートという肺病病みの少年が誕生するよりも前に、中傷家・陰謀家の形象が作者ドストエフスキの頭に宿っていたことにある。そしてこの、イッポリートの原像ともいべき形象は、「完全に美しい人間」ムィシユキン公爵が生まれるまでは主人公の役割を与えられていたのである。

2. 「完全に美しい人間」と初稿『白痴』

『白痴』は雑誌『ロシア報知』の1868年1月号からほぼ1年にわたって掲載された。この小説の主人公ムィシユキン公爵において、「完全に美しい人間」を描くつもりであるという意図をドストエフスキが漏らしたのは、1867年12月31日付アポロン・マイコフ宛書簡と、翌1868年1月1日付ソフィヤ・イヴァーノヴァ宛書簡<28 - - 241及び251>においてであった。この時既にドストエフスキは、『白痴』第1篇の最初の7章分（主人公ムィシユキン公爵が初めて訪れたエパンチン家を辞す場面まで）を『ロシア報知』の編集部に送付していた。すなわち、彼が二人の文通相手に自らの意図を漏らしたのは、構想段階の初期においてではなく、主人公の基本的な人物像について、もはや変更し得ない段階に至ってからのことなのである。

しばしば等閑視されることだが、上記マイコフ宛書簡の中で、ドストエフスキはその年の夏以降の自らの仕事を振り返って次のように書いている。

（・・・）そういうわけで、この夏と秋の間中ずっと色々なアイデアを組み合わせていたのですが（中にはとても手の込んだのもあったのです）ある種の経験から私には、何かあるアイデアが浮かんでも、それがわざとらしいものになるだろうとか、難しいものになるだろうとか、もう少し寝かせておいた方が良いだろうといったことが常に予感されていたのでした。漸くのことで私はあるひとつのアイデアで行

くことにして仕事にかかり、随分と書いたのですが、新暦の12月4日（露暦の11月22日 松本）になって全部悪魔に呉れてやりました。誓って言いますが、この小説もそこそこの物にはなり得たのです。でも、他ならぬその、そこそこだが完全に良くはないというやつで、とても厭になったのです。私が書こうとしていたのはこんなものではありませんでした。（・・・）それから私は（だって私の未来の一切がここに懸かっていたのですから）新しい小説の案出に骨を折り始めました。前の小説は何としても続けなくなかったのです。新暦の12月4日から18日一杯まで考えました。平均して毎日6つはプランが出たと思います（それ以下ではありません）。私の頭は挽き臼に変わってしまいました。どうして気が狂わなかったのか、と不思議に思います。12月18日になってやっと私は新しい小説を書き始め、1月の5日（新暦の）に第1篇の5章分（印刷紙5台分位）を編集部に送り、1月10日（新暦の）には第1篇の残り2章分を送ると言って遣りました。昨日、11日にこの2章を送り、こうして第1篇の全体 印刷紙6台から6台半分を送付し終えたわけです。（・・・）

< 28 - - 239 ~ 240、圈点は原文でイクリック >

「完全に美しい人間」を描く小説『白痴』の導入部分 は、新暦の12月4日（露暦11月22日）から僅か1ヶ月余りほどの間に構想され、書き上げられたのだということがわかる。そしてそれは、12月4日（露暦11月22日）よりも前に構想され、またある程度書き上げられていた小説、「そこそこだが完全に良くはない」ために「悪魔に呉れ」られてしまった小説とは別の作品なのである。

『白痴』の創作ノートは二種に大別できる。一方は既に『白痴』の雑誌掲載が開始されて後、執筆過程と並行して書かれていったものであるが、もう一方は新暦の1867年9月14日から同年11月11日の間に書かれたものである。マイコフ宛の書簡に見られるドストエフスキイの述懐を信じるならば、後者はわれわれの知る『白痴』のためのものであるというよりも、「悪魔に呉れ」られた「前の小説」のためのものであると考えなければならない。仮にこの

実現されなかった小説を「初稿『白痴』」と呼ぶことにするが、この初稿『白痴』の創作ノートは従来『白痴』のためのものとして扱われてきた。確かに幾つかのモチーフにおいて現行の『白痴』と通有する箇所が無くもないが、それ以上に、これらのノートが『白痴』の創作ノートと見なされる最大の理由は、主人公が作者によつて一貫して「白痴（ ）」と呼ばれている点にあるといえよう。しかしながら、この初稿『白痴』の創作ノートを通読して特に目を引くのは、「白痴」と呼び慣わされている主人公の性格と、われわれが知る『白痴』の主人公ムィシュキン公爵の性格との、対照的といっても良いほどの相違なのである。初稿『白痴』の主人公と擬されていたこの「白痴」像には、「完全に美しい人間」の相貌は微塵も窺うことができない。

3. ラスコリーニコフ的な「白痴」

1867年9月14日から11月11日までの日付を有する初稿『白痴』のための創作ノートの中には、幾つものプランが犇めき合っている。ひとつのプランが書き付けられると、それを補足する形で、あるいはそれを打ち消す形で別のプランが書き付けられ、更に別のプランがそれにとって代わる。だが、前節でも述べたように、境遇や周囲の人間関係が様々に変化していく中でも、このノートで主人公は一貫して「白痴」と呼ばれている。

後に完成する『白痴』の主人公ムィシュキン公爵は並み外れた謙虚さと善良さ、そしてキリスト教的な博愛精神の持ち主として描かれることになるが、初稿の「白痴」は、まずその傲慢さにおいて際立った人物として構想されている。たとえば創作ノートの冒頭に記されている最初のプランでは、「白痴」は零落した地主家庭の第二子であるとされていた。一家の^{あるじ}主でありながら、家族を放ったらかし、外国を放浪した果てに借金で身動きが取れなくなった「父」（『未成年』のヴェルシーロフが想起される）、気取りが捨てられず、無分別で第一子（「息子」）ばかりを溺愛する「母」、金貸しをしている士官を許婚に持つブルジョア的な「姉」（もしくは「妹」）――これらの人物についてのメモがひと通り終わったところで、主人公「白痴」については次のように書かれている。

(・・・)そして最後に「白痴」。彼を憎んでいる「母親」により、白痴で通っている。家族を養っているが、何もしていないと思われる。彼には癲癇と神経性の発作がある。学課を最後まで終えなかった。家族の中で暮らしている。(・・・)「白痴」の情欲は強く、愛の欲求は激しく、傲慢さは度を越している。傲慢さゆえに自制し、自らに克つことを欲する。屈辱の中に愉悦を見出している。彼を知らない者は彼を笑い、彼を知る者は、彼を恐れ始める。(・・・)

< 9 - 141、圈点部分は原文でイタリック >

癲癇を病んでいるという一点を除けば、この「白痴」が後のムィシュキン公爵とは似ても似付かない性格の持ち主であることは一目瞭然であろう。零落した家族を養いながらも、「母」からは白痴扱いを受け、第一子(「息子」)に比べて不当な境遇に甘んじている青年の姿が浮かび上がってくる。だがこの「白痴」は本当に白痴なのではない。白痴は彼の佯りの姿に過ぎず、逆に度を越した傲慢さこそが彼の本当の顔なのである。家族の中における「白痴」の弱さもまた、彼自身が自覚している強さの裏返しである。また、ここでは「白痴」の情欲の強さについても触れられているが、このプランを更に発展させたノートでは、彼が登場人物の一人である女性を強姦することも構想されていた< 9 - 143、144 >。ムィシュキン公爵が女性に対しては性的に不能であることが仄めかされていることを思えば、この点でも「白痴」は公爵と正反対の性格を与えられていたと考えることが出来る。

ヒロイン像や「父」の兄弟である「伯父」の像なども織り込みながら、零落した地主の第二子としての「白痴」にまつわる物語をあれこれと検討した上で、主人公の性格を確認するかのように、ドストエフスキイはあらためて次のように書き記している。

N. B. 「白痴」の主な性格。傲慢さゆえの自己抑制(徳のゆえならず)とあらゆることに対する狂暴なまでの自己解放。しかし自己解放はいまだ夢想であり、今のところはただ痙攣的な試みに過ぎない。こ

のようにしていれば、彼は人非人のような状態にまで達するのである
うが、愛が彼を救う。(・・・)

< 9 - 146、圏点部分は原文でイタリック >

「白痴」の傲慢さは自己抑制という形で封印されているが、彼の自我は解放を欲している。たとえば上に見た情欲の激発のように、彼の自己抑制は時に「痙攣的」な形で崩れるとはいえ、自己解放という「夢想」は未だ具体的な行動へと移されることがない。モチュースキイは、「初稿の白痴はその性格においてムィシュキン公爵と真っ向から対立している。それは傲慢な個性であり、ラスコーリニコフの精神的な兄弟である」と述べているが、傲慢な主人公がやがて自らを解放し(「夢想」を「行動」へと移し)、「人非人のような状態」に達しながらも「愛」()によって救済されるとすれば、ドストエフスキイがここで自らに確認している主人公像は、正しくラスコーリニコフのものと同一であると言える。

「零落した地主の第二子」という設定は、その後の創作ノートの展開の中で別の設定に変えられていく。地主が「将軍」に変わったり、「息子」が「美男」に変わったり、また「白痴」の運命に「伯父」が深く関わってきたりするものの、「白痴」の傲慢な性格と、家庭内での虐げられた境遇にはほとんど変化が見られない。

10月17日(露暦10月5日)にドストエフスキイは、「主要なプランへの注」と題した上で、「白痴」が家庭の中でどのように遇されていたか、そして彼自身がこのことをどのように受け止めていたかについて、箇条書きの形でメモを書いている。ここでも、家族によって軽んぜられ、虐げられている主人公は、本当の意味での白痴なのではなく、並み外れて傲慢な人間であり、傲慢さのゆえにおのれを抑えているのだということが確認されている。ここで見逃してはならないのは、ドストエフスキイが主人公「白痴」の身の上について、箇条書きのメモの後に短く「あるいは継子()」< 9 - 157 > と書き添えていることである。

4．庶子・継子モチーフの誕生

9月14日のノート以来、主人公の「白痴」が家族の中であって虐げられ、冷遇されているというモチーフが執拗に繰り返されながら、なぜ彼がそのような扱いを受けなければならないのかについての説得力のある動機付けはなされていなかった。「あるいは継子」とノートに書き付けることによって初めて、ドストエフスキイは「白痴」が家族の中で孤立し、排斥される具体的な理由をノートに記したのだといえる。「あるいは継子」この着想は、以後作家の中で急速に膨らみ、そしてそれと軌を一にするようにして、主人公「白痴」の性格にも変化が生じ始める。「白痴」の新たな性格は、時にイッポリートのそれへの接近を見せる。

翌10月18日（露暦10月6日）には、「白痴」はまず「庶子()」として構想されている。「小説の最終的なプラン」の中には次のようなメモが見出される。

「伯父」。二人の息子。「白痴」は庶子であり、もう一人は嫡出子と認められず、別れて暮らしている。ヒポコンデリー患者であり、兄弟が到着する前にピストル自殺しようとした。

(. . .)

「白痴」は「息子」を憎んでおり、「伯父」に彼のことを中傷しようとしているが、極めて巧みである。 < 9 - 159 >

「白痴」は「將軍」の息子ではなく、將軍の兄弟である「伯父」の庶子であるという設定になっている。「ヒポコンデリー」、「ピストル自殺」等、イッポリートを思わせる特徴と共に、ここで注目すべきは、庶子となることによって、もう一人の息子に対する憎悪が彼に芽生え、中傷という行動に走らせていることであろう。以後、「白痴」が庶子若しくは継子であり、その事と関連して彼が憎悪を抱いたり、人を中傷したりするというモチーフが、創作ノートの中に頻繁に現れるようになる。この引用部分の後には一連のプランが続き、最後は「継子か実の子か、しがし庶子ではない」 < 9 - 160、圈

点部分は原文でイタリック>という言葉で締め括られている。

同じ10月18日（露暦10月6日）の日付を持つノートでは、「「白痴」
「伯父」の息子」という規定がなされた上で数行のメモが続き、最後に「P.
S. あるいは、継子」の一行がある< 9 - 160 ~ 161、圈点部分は原文でイタ
リック>が、興味深いのはそれに続いて、次のようなメモがあることである。

イヤゴ-の案

「白痴」の性格に付随して イヤゴ-。しかし美事に終える。関係
係を絶つ、等々。

N. B. すべての人を中傷し、すべての人に対して陰謀をめぐらし、
望みを達し、金と花嫁を取って、そして捨てた。< 9 - 161 >

周知のように、シェイクスピア描くところのイヤゴ-は、オセローに対し
てその妻デズデモナと部下の不貞を中傷し、オセローの胸に嫉妬の炎を燃
え上がらせると同時に、オセローを破滅させるための陰謀をめぐらせた。ド
ストエフスキは「白痴」に、イヤゴ-と同様の中傷家・陰謀家としての性
格を与えようとしているのである。もっともイヤゴ-の陰謀はオセローを破
滅させると同時に自らの破滅をも招いた。ドストエフスキは「白痴」の陰
謀を成功せしめ、彼に望むもののすべてを得させた上でそれらを放棄させ、
彼の終わりを「美事」なものにしようと構想しており、これは、ロスチャイ
ルドのような富豪になった上で、その富を惜し気もなく捨てて見せようと夢
想する『未成年』のアルカーヂイ・ドルゴルーキイを思わせるモチーフでも
ある。

10月22日（露暦10月10日）の一連のプランの中では、「白痴」が一時的に
「庶子」と呼ばれている。現行の『白痴』の冒頭部分で後に用いられた、列
車内での邂逅という場面設定が作者に芽生えていることが窺われる。

「庶子」。「息子」と共に車中。会った。「庶子」はこれが「息子」
だと知っている。「息子」は「庶子」が居るということを耳にしたこ
とがあるだけである。(・・・)「息子」は「庶子」と再び車中で一緒

になる。「庶子」は打ち明けぬが、「息子」から探り出した。「伯父」のもとで出会う。「あなたは打ち解けない方ですね」しかし「庶子」は「息子」を魅了する必要があった、そして彼は魅了した。
(・・・) < 9 - 163 >

主人公の呼称はすぐに「庶子」から「白痴」に戻り、更にプランが発展させられる。

? N. B. ? 「白痴」は「息子」を中傷したが、奇妙なことに、「息子」はお人好しで(フェーチャ) この人の良さで彼はますます「白痴」を魅了する。ついには、かくも大人しく彼を許すということで。「白痴」は自身を笑いながらも「息子」に惚れ込む。

< 9 - 163、圈点部分は原文でイタリック >

庶子である「白痴」は、恐らくは異母兄弟である「息子」に対して何らかの陰謀を企てているようであり、「息子」を中傷するのだが、「息子」の人の良さや寛大さのためにかえって自分が魅了されてしまう。「白痴」はそのような自分を嘲笑しながらも、「息子」に惚れ込まずにいられない。「白痴」と「息子」のこの関係は、やがて『白痴』の中でも活かされることになる。

5. 庶子・継子モチーフの発展と消滅

以後数日の間、主人公「白痴」を庶子とすべきか、継子とすべきかについて、ドストエフスキの心は揺れ動いている。様々なプランが構想されていく中で、家族を初めとする周囲の人物に対する「白痴」の憎悪と陰謀を好む性格は更に強められていく。

「白痴」。最初の結婚による(息子 松本) 村から出てきた。教育がある すべてを隠している。反抗によって専制を破る。「將軍」の心を傷つける。「將軍夫人」を侮辱する。(・・・) 彼の憎悪は説明できないほどである。彼は陰謀をめぐらし、中傷する。彼は、取るに

足りない人物として家族の中に入り、全員の上に立った。(・・・)
N. B. 最初「白痴」は家族の中に反乱を引き起こす。彼がやって来る時、彼はただ反乱の端緒と反乱への欲求を見るだけであるが、自分で、自分の感情で反乱を企てる。それから全員の信頼を得る。(・・・)

< 9 - 170 ~ 171、圈点部分は原文でイタリック >

ここまで来るとドストエフスキイが構想していた小説の骨格はかなり見易いものとなってくる。継子なり庶子なりであるために家族から離れて成長した主人公が成人して自分を疎外していた家族の中に入り込み、家庭内の調和を乱した上で家族全員の支配者になる、という復讐譚的な構図である。しかしながら、ドストエフスキイがこの陰謀家の「白痴」のために用意していた運命は単なる復讐者のそれではなかったようである。すべての人を支配した「白痴」が常に憂愁を感じ、自己を侮蔑し、自身の成功を憎悪することをドストエフスキイは併せて書き留めている。そしてこのような「白痴」に与えられる出口は依然として「愛」なのである< 9 - 171 >。

「白痴」の身上を如何なるものにするかというドストエフスキイの迷いは、11月2日(露暦10月21日)にピークに達する。「庶子」、「継子」という言葉ではなく、「嫡出()」、「非嫡出()」という言葉が用いられているが、「白痴」を嫡出子とするか否かについてのドストエフスキイの思案の跡を留めるメモはこの一日だけのノートで7ヶ所も見られる。中でも次のメモなどは、庶子もしくは継子というモチーフが小説の根本的な思想に重要な関わりを持つものであることを良く物語っているといえよう。

主要な問題：白痴の人物像がより興味深く、伝奇的に、鮮明に思想を表現するためには何が肝腎か？ 嫡出子の場合か非嫡出子の場合か？ < 9 - 187 >

主人公が嫡出であるか非嫡出であるかに拘らず、ドストエフスキイが描き出そうとしているのは、主人公と父親とのいびつで脆弱な関係である。創作ノートの初期の段階から設定され、この時期においても継続している主人公

の傲慢さ、更に中傷・陰謀癖、復讐心等々の諸性格は、このような父親との関係に起因するものであるといえよう。そもそも「父と子」というテーマは、ツルゲーネフの『父と子』（1862）を産み出した19世紀半ばのロシアにおける時代精神としての世代間対立を俟つまでもなく、その創作活動の全過程にわたってドストエフスキイを捉え続けていた。特に、庶子であったり、幼年時代に父親から遠ざけられていたために生じたいびつな父子関係は、彼の好んで題材とするところである。初稿『白痴』の主人公もまた、この系列に属する一形象として構想されていたことはまず疑いを容れない。同じ11月2日、ドストエフスキイは「非嫡出子の方が良い。すべてに説明がつくから」<9 - 189>とノートに記しているが、この「すべてに説明がつく」という言葉は、主人公の境遇と性格及びその行動の因果関係についてのものとして読むのが至当であろう。

11月2日（露暦10月21日）を境にして、「白痴」が庶子であるか否かについてのノートは次第に少なくなっていく。代わって、主人公が公爵であることについての言及がなされたり、子供達と関わりを持つ瘋癲^{ユロージグイ}行者であるとのプランが記され、僅かに『白痴』のムィシュキン公爵の面影が仄見える部分もあるが、それらはまだ主人公像の決定的な変更に至るものではない。初稿『白痴』の主人公の身の上についてドストエフスキイがどのような決定を下したかは、創作ノートからはついに明らかにできないのである。

いずれにしても、これまでの創作ノートを具体化するべく、ドストエフスキイは一度は稿を起こした。だが、先のマイコフ宛の書簡に見たように、12月4日（露暦11月23日）にはこの初稿『白痴』の執筆を断念し、新たな小説（現在の『白痴』）の想を練り始めるのである。その結果、構想も新たに書き上げられた『白痴』の主人公ムィシュキン公爵の人物像には、初稿『白痴』の主人公像に見られたような傲慢さや強い情欲は見られない。そして、恐らくは庶子モチーフ（若しくは継子等、父親との脆弱な絆をもたらすモチーフ）と表裏のものであったと想像される中傷・陰謀癖もムィシュキンとは無縁のものとなっている。むしろそういったものをすべて漂白し切った所に生まれたのがムィシュキンの性格であり、この性格をもって、ドストエフスキイは「完全に美しい人間」たらしめようとしたのである。

5. 庶子・継子モチーフの行方

「完全に美しい人間」を描くべく『白痴』の連載を開始したドストエフスキイが、作品の執筆と並行して書いていった創作ノートには、イッポリートが初稿『白痴』の中傷や陰謀を好む主人公の生まれ変わりであることを明瞭に示している記述が見られる。細かいものを挙げていくと限りがないが、たとえば9月15日には、「イッポリート 小説全体の軸」< 9 - 277 >という一文の後で、中傷や告げ口などを弄して、ムィシュキン公爵、アグラヤ、ガーニャ、ロゴージンを籠絡していくイッポリートの姿がかなり詳しく描かれており、イッポリートによる殺人までもが構想されている。『白痴』の完成稿におけるイッポリートの陰謀は、語り手がすべてを語ろうとしないために、甚だぼんやりとした無目的なものとしか見えないが、このノートでは、イッポリートの目的が周囲の人々を精神的に支配し、自らの意のままに動かすことにあるということが明らかにされている（「イッポリートが・・・を思い通りにする、支配する < または > 」という表現が繰り返し用いられる）。興味深いのは、そのほとんどが大文字で書かれた次の一節である。

主要なこと。N. B. 「公爵」は一度としてイッポリートに譲歩しなかった、そして彼を洞察することによって（このことをイッポリートは自分で知っており、癪癪を起こして絶望せんばかり）また彼に柔和に接することによって、彼を絶望へと導く。「公爵」はその信じ易さによって勝利する。 < 9 - 278 >

このメモは、ムィシュキン公爵に対して終始反発を覚えながらも、ついに精神的には優位に立つことができなかった『白痴』のイッポリート像にほぼそのまま重なるものであるが、それと同時に、第4節で見た初稿『白痴』の「白痴」と「息子」の関係（「息子」の人の良さに魅了された「白痴」が自分を嘲笑しつつも「息子」に惚れ込んでしまう）にも酷似しているといえよう。

ここで考えなければならないのは、初稿『白痴』の主人公の中傷・陰謀癖

に具体性を帯びさせ、説得力を与えるものとして構想されていた彼の境遇の特殊性、すなわち庶子または継子として生まれ、ために父親との関係がいびつであるというモチーフは、果たしてイッポリートには受け継がれなかったのかという問題である。

現在われわれが読む『白痴』における庶子モチーフとしては、孤児となったムィシュキン公爵を養育したパヴリーシチェフの庶子であると名乗り出て、公爵に養育費の返還を要求したブルドフスキの一件（第2篇第7章～第10章）が目を引きが、これはガーニャの調査によって全くの事実誤認であることが明らかになった。だが、この「庶子」ブルドフスキの事件こそが、イッポリートが読者の前に姿を現す最初の場面であることに注意しなければならない。ナスターシャ・フィリッポヴナとロゴージンを除いて、この小説のほとんどすべての登場人物が顔を揃えているこの場で、イッポリートは再三にわたって不自然な振る舞いをしている。

たとえばブルドフスキの要求が自身の母親の名誉を汚すものだといって彼を宥めようとするムィシュキン公爵に対して、イッポリートは「息子は父親の淫蕩な行為に対して責任は無いし、母親には罪は無いんだ」と「熱くなって甲高い声で」言い、更に、公爵にそんなことを言う権利が無いことを「極めて不自然な声で」喚き立てている<8 - 227>。イッポリート自身が後に用いた言葉を使えば、いかに自分の「隣人」(<8 - 325>)であるブルドフスキの身の上に関わることであるとはいえ、ここでの彼の反応は敏感に過ぎよう。しかし、この場面における彼の言動の不自然さは、その場に居合わせたエパンチン將軍夫妻への態度に最も強く現れている。

イッポリートはこの時までには夫妻に会ったことがなく、友人のコーリャ・イヴォルギンを通じて噂を聞いていただけであった。それにも拘らず彼は、エパンチン將軍に対しては常に挑発するような言辞を吐き、一方で、その妻であるリザヴェータ夫人に対しては、時にシニカルな調子を交えながらも、ほとんど甘えているといっても良いほどの打ち解けた態度を示すのである。たとえば夫人に対して、身分も顧慮せず自分のようなものと話をするために帰宅を思いとどまってくれたことに礼を述べながら、イッポリートは次のように付け加えている。

(・・・) とはいえあなたの御主人である閣下(エパンチン將軍のこと 松本)の顔付きだけ見ても、あの人にとってはこういったこと一切が不愉快であるというのが分かりますがね... へっ、へっ！
(・・・) < 8 - 243 >

また、自分はもうすぐ死ぬのだということをその場の一同に仄めかした後で、特にエパンチン將軍に向けて、彼は次のように毒吐くのである。

(・・・)「閣下！閣下に私の葬儀に御来駕の栄を賜りますようお願い致します、もっともそのような名誉を授けてやろうというお気持ちがあればですが、そして... 御一同は將軍の後についてお越し下さい！.. < 8 - 246 >

エパンチン將軍に対するこのような不遜な態度とは対照的に、リザヴェータ夫人に対するイッポリートの態度は、一時的にせよ、極めてインチームなものであり、そこには母親に甘える子供の姿を思わせるものがある。だが最も奇妙なのは、興奮し、泣き始めたイッポリートがリザヴェータ夫人の胸に顔を埋めながら、不意に、寡婦である母と幼い弟妹から成る自分の家族のことを話し出すことである。

「僕にはあちらに」とイッポリートは自分の頭をもたげようとしながら言った。「僕には弟が一人と妹たちが居んです。子供です、小さくて、貧しくて、罪が無くて... あの女はあの子たちを墮落させてしまいます！あなたは 汚れの無い人です、あなたは... 御自身が子供です、あの子たちを救ってやって下さい！あの子たちをあの女から奪い取って下さい... あの女... 恥だ...(・・・)

< 8 - 248、圈点部分は原文でイタリック >

余命幾許も無い長男が、自分が死んだ後の幼い弟妹のことを心配して後事

を託すということ自体は不思議なことではない。イッポリートのこの言葉が異様なのは、幼い弟妹たちの救いが母親から彼らを引き離すということにある点であり、更に初対面のリザヴェータ夫人にこれを依頼しているということである。エパンチン將軍への並々ならぬ敵意といい、リザヴェータ夫人へのこの不可解な依頼といい、イッポリートがエパンチン家と何か特別な関係を持っていることがここでは示唆されていると思われる。そして『白痴』の構想過程の検証で確認したように、イッポリートが庶子・継子モチーフをかつての主人公「白痴」から受け継いでいる可能性があるとするれば、ここで浮かび上がってくるのは、イッポリートはかつてエパンチン將軍がイッポリートの母、大尉夫人と呼び慣わされているマルファ・ボリーソヴナに産ませた庶子であるという構図なのである。もしもこの推測が当たっているなら、自らを「パヴリーシチェフの息子」であると錯覚したブルドフスキの一件は、イッポリートの隠された出自を暗示するための又とない背景であるといえよう。「息子は父親の淫蕩な行為に対して責任は無いし、母親には罪は無いんだ」というイッポリートの言葉も、「隣人」ブルドフスキのためばかりではなく、自分自身のために発せられたものとして聞くこともできるのである。そして、イッポリートがエパンチン將軍の庶子であると仮定するならば、イッポリートが未だ登場しない第1篇において、既に幾つかの伏線が張られていることに気付くのである。

6. 用意され放棄されたディテール

『白痴』の冒頭近くで、エパンチン將軍を紹介するにあたり、作者は彼のトランプへの情熱に触れている< 8 - 15 >。一方、イッポリートの母マルファ・ボリーソヴナの家の中を描く際に、作者はそこに2台のトランプ机があることに殊更に2度も言及し< 8 - 111 >、それだけでは不足だと思ったのか、ちょうどその場に行き合わせたコーリャ・イヴォルギンに「僕は今店にトランプを買いに行ってたんですよ」と前後の脈絡も無く言わせている< 8 - 110 >。この執拗なトランプへの言及は、小説を最初から読み進めてきた読者には、たちまちエパンチン將軍の情熱を連想させるものである。愛人関係によって趣味が伝染するか否かというよりも、ここではイッポリート

の家庭とエパンチン將軍の隠れた結び付きを示唆することが目的なのだといえる。

小説の中では、イッポリートの母親マルファ・ポリーソヴナは半ば公然とイヴォルギン將軍の愛人（ ）になっている。「あの女はあの子たちを墮落させてしまいます」というイッポリートの言葉は、恐らく母親のこの愛人としての現在の生活を指していると考えられるが、そもそもこの「愛人関係」は互いに乏しい相手の金を搾り取ろうとする、欲得ずくの異様なものなのである。イヴォルギン將軍はかつてエパンチン將軍の同僚であったが、酒と虚言癖で身を持ち崩し、実業家として成功を収めているエパンチン將軍に比べて遥かに惨めな境遇にある。エパンチン將軍はこのイヴォルギン將軍とは「ある事情から行き来を止めている」とムィシュキン公爵に話している< 8 - 30 >が、もしも彼とマルファ・ポリーソヴナの間にかつて何らかの秘密があったとすれば、現在マルファを愛人としているイヴォルギン將軍を遠ざけねばならない「ある事情」とは、単に飲酒や虚言のみを指すのではなく、かつて自分と関係があり、イッポリートという私生児まで産ませたマルファ・ポリーソヴナを、イヴォルギン將軍に押し付けたことを示唆しているのではないだろうか。陰惨な仮定ではあるが、そう考えることによって、小説の最初の山場である、ナスターシャ・フィリッポヴナのガーニャとの結婚話には全く違う方面から光を当てることができるのである。

イヴォルギン將軍の長男であるガーニャは、第1篇ではエパンチン將軍に雇われている身分であるが（エパンチン將軍が他ならぬイヴォルギン將軍の息子を雇った理由についても詮索の余地はあろう）、エパンチンの仲立ちで、その友人トーツキイの囲い者であったナスターシャ・フィリッポヴナを7万5千ルーブリの持参金付きで押し付けられようとしている。息子の運命が決せられようとするまさにその日に、マルファ・ポリーソヴナの家に向かうイヴォルギン將軍は、ムィシュキン公爵に次のように語っている。

（・・・）この大尉夫人（マルファ・ポリーソヴナのこと 松本）
の家で、わしは精神的に復活するのでして、人生や家庭の悲しみをわしはここに持って来るのですよ... それに今日わしは、まさにその

大きな道德上の重荷を抱えておりますからな、だからわしは(・・・)

< 8 頁 圈点は松本による >

もしもイヴォルギン將軍が、かつてエパンチン將軍から（無論何らかの見返り付きで）マルファ・ボリーソヴナを押し付けられたのだとしたら、自分の息子もまた似たような運命を、しかも同一人物によって負わされようとしていることに、それだけでなくも半ば調子の狂った彼の神経はとても平静を保ってはいたらなかった筈である。酔漢の戯れ言めかして語られたイヴォルギン將軍の言葉は、自らを責めると共に、エパンチン將軍の二重の罪をひそやかに告発しているとはいえないだろうか。

このように、既に小説の第1篇において、イヴォルギン家をも巻き込む形で、エパンチン將軍とイッポリートの母マルファ・ボリーソヴナとの過去の関係を示唆するディテールはちりばめられていたのである。そして第2篇において、イッポリートがエパンチン將軍の庶子であるというモチーフは、「パヴリーシチェフの息子」事件を恰好の背景として小説の表面にその輪郭を臙げに浮かび上がらせる。このモチーフが無ければ、中傷家・陰謀家としてのイッポリートの性格は具体性を欠き、なぜ彼がムィシュキン公爵を中心とする事件の渦中に身を投じ、イヴォルギン家やエパンチン家に不幸を招来すべく画策するかが明らかでなくなるのである。だが、どういうわけかドストエフスキは、小説の第3篇以後、このモチーフを展開することを放棄してしまった。結果としてイッポリート像は統一性を欠いた「抽象的」なものとならざるを得なかったのである。

前作『罪と罰』でもそうであったが、ドストエフスキは『白痴』の筋立てを最後まで考え尽くした上で執筆を開始したのではなかった。小説を書き進めながら、筋をどのように展開していくかについて彼が頭を悩ませていたことは、執筆過程と並行して書かれた創作ノートに明らかである。小説の前半で張りめぐらせておいた伏線を後になって放棄してしまうということも考えられないことではない。イッポリートに関していえば、その性格の因って来るものを形而下から形而上へ引き上げようという意図が作家に生じた（そ

注

以後、創作ノートからの引用が続くが、創作ノートの中でドストエフスキイは登

МОТИВ ПОБОЧНОГО СЫНА В ПЕРВОЙ РЕДАКЦИИ РОМАНА «ИДИОТ» И ОБРАЗ ИППОЛИТА

К. Мацумото

Широко известно, что в романе «Идиот» Ф. М. Достоевский был намерен создать образ „положительно прекрасного человека“. Герой этого романа, следующего за «Преступлением и наказанием», был задуман не таким „прекрасным“.

Изображать героя „положительно прекрасным человеком“ Достоевский решился, вероятно, только в конце ноября 1867 года. За два с лишним месяца до этого решения писатель продолжил работать над так называемой первой редакцией романа, содержание которой можно угадывать лишь по подготовительным тетрадям к роману.

В дошедших до нас тетрадях, начатых от середины сентября 1867 года, характер героя Идиота (так называет его писатель) оказывается совсем иным, чем характер князя Мышкина, героя окончательной редакции романа. Идиот, во-первых, отличается от князя Мышкина своей гордостью, напоминающей образ Раскольникова и отчасти образ Ставрогина. Писатель, вероятно, намеревался в конце романа спасти гордого Идиота любовью так же, как в предыдущем романе спас Раскольникова любовью Сони Мармеладовой.

Кроме гордости герой наделен и сильной страстью к женщинам (как у Рогожина), и любовью к деньгам (как у Гани Иволгина), чего нет у князя Мышкина. Но одной из самых примечательных особенностей у Идиота является его злобное интриганство,

сплетничество и мстительность. Заслуживает внимания то обстоятельство, что в подготовительных тетрадах последние особенности героя как бы были мотивированы его положением в семье: он замышляется то отверженным в семье, то побочным сыном, то пасынком и т. д.

В конце ноября 1867 года Достоевский бросил все планы первой редакции и снова занялся переделкой романа. По ходу работы над романом, в процессе превращения Идиота в князя Мышкина, совсем изменился и характер героя. Некоторые особенности Идиота перенесены на второстепенных персонажей, и, главное, интриганство, сплетничество, мстительность оказались присущи Ипполиту Терентьеву, который после неудачного самоубийства является в романе интриганом, сплетником и подводит к гибельной катастрофе князя Мышкина, Настасью Филипповну и две семьи: Епанчиных и Иволгиных.

Здесь возникает вопрос: не наследовал ли Ипполит от Идиота положение в семье, мотивирующее его особенности характера? Без этой мотивировки характер и поступки Ипполита остались бы слишком отвлеченными, хотя отчасти мотивированными его тяжелой чахоткой.

В первой половине романа рассыпаны намеки на то скрытое обстоятельство, что Ипполит – побочный сын генерала Епанчина, и, следовательно, мать Ипполита, капитанша Марфа Борисовна, когда-то была любовницей Епанчина. Такой гипотезой можно объяснить и двукратное упоминание автором о ломберном столе в доме капитанши (у генерала Епанчина сильная страсть к картам), и сложное отношение Ипполита к генералу и генеральше Лизавете Прокофьевне и т. д.

Предположить скрытую связь Ипполита с генералом Епанчиным не безосновательно, так как через все творчество

Достоевского постоянно проходит мотив побочного сына, или мотив искаженных взаимоотношений детей и отцов, начиная с отношений Покровского и Быкова («Бедные люди») и кончая Смердяковым и Федором Карамазовым («Братья Карамазовы»). В «Идиоте» этот мотив недостаточно развит, так что образ Ипполита не смог избежать недостатка конкретности. Мотив побочного сына снова появится, не периферийным, а главным через семь лет в романе «Подросток».

The Bastard Motiff in the Drafts of "The Idiot" and Ippolit Terentiev

Ken'ichi MATSUMOTO

Key words: Dostoevsky, Idiot, Ippolit.